

# メインブレイスの幸地学

ニューヨークアートエクスポから

上原 誠勇



<上>

ある美術雑誌で読んだことが「絵画は表は芸術で裏は経済である」と。言い得て妙だなと感心した。これは美術品を単に見て楽しむ側からは受け入れたくないし、純粋な芸術愛好家にとっても好ましくない一面かもしれない。しかし高い次元で芸術表現がされ、数少ない価値ある「モノ」であるならば、当然経済行為がついてくるはずである。

マンガみたいな絵がなんて六億円もするんだ、と東京都議会で大騒ぎがあったのは記憶に新しいが、お化けみたいに何の変哲もないと思わせるような美術品が、ウン億円と値がついたりするから美術は面白いワロワイ。

## 芸術と経済

美術品は非日常の芸術と、日常の経済の二律相反する要素を含ん

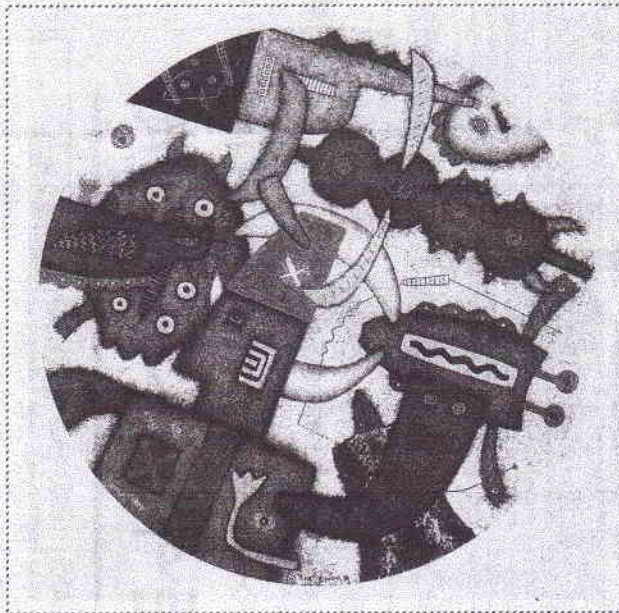
でいる。相反する二つの因子は絶対のケンカ相手である。打ち合い、からみ合い、表裏一体となって「モノ」と化したものが美術品である。私たちの現実社会に立ち現れる美術品は、そのような「モノ」である。

美術品の値段は経済のしくみの中で、美術マーケットという場を得て成立する。値段の決定は二律相反する要素に満ちた二つの因子のバトルの結果と云えよう。しかし、日常の美術市場の状況は、あみだクシのように複雑で先が読みにくい。もう少し加えて言うならば、美

術品の値段は、芸術的価値のみで決定されるものでもなければ、投機的な対照として経済的な側面だけで決定されるものでも、もちろん

# 国際美術市場に登場

## マスコミや画廊も注目



幸地学作品「The Sky and the Land」

### 作家の修羅場

〜と云えるだろう。

さらに、その時代に求められる芸術の地平や芸術の質、そのバックボーンとなる作家の思想哲学が作品の中になければ、時の経済とからみバトルを組むことはできないし、当然国際美術マーケットに出ていることほない。そのような意味で美術品は時代を生きぬく人間のようでもあり、その時代を生きてくる人間の意識の化身の「生きモノ」

今年三月七日から十一日までニューヨークで開かれた第十八回アートエキスポは、世界二十五カ国の画廊が集まった国際大美術見本市である。いわば国際美術試合のバトルリング上と云ったところか。沖縄コンベンションセンターを四倍広げたような大イベントホールに五百軒近い画廊が出店している。それぞれの画廊は、これはどうだと言わんばかりに自前の

来店もあって人気は上々だった。彼をこの舞台に引っ張り出したのは、ソホーの画廊アートアリアンス画廊とマイアミの芸術家を支援する団体、スターアートファウンデーションの二者で実現したようである。一月近くパリのアトリエと家族を離れ米国の生活は手厳しいマネージメントで多少疲れているかなどの面影も感じられた。しかしアリスの中で眼光鋭く、エネルギーにあふまう姿は実にたのしかった。(画廊沖縄代表)

今年ニューヨークアートエキスポは、音楽と美術がテーマ。私たち沖縄出身の幸地学の絵と彫刻が、正面入り口のメインブレイスに展示された。絵画はリトグラフ六点にタプロロー二十五点、彫刻(ブロンズ)六点の展示である。幸地は先のロサンゼルスグラミー賞のシンボルアーティストにも選ばれ気を良くしての登場である。ポスターにサインを求める客も多々、マスコミや他のディーラーの

### エネルギー的な幸地

推す作家の作品を展示し販売している。言ってみればこれは作家にとって国際競走(??)の舞台であり、現実の修羅場である。